

## エレミヤの召命の必然性

エレミヤ書 1 章 1～19 節

●エレミヤ書 1 章に記されているエレミヤの預言者としての召命の特性とその必然性について瞑想したいと思います。エレミヤが神の召しにあずかったのは、ユダの王ヨシヤの治世 13 年目(B.C.627 年)で、エレミヤはそのとき 17、18 歳頃の青年の時です。彼は神の召しを受けた時、自分では「まだ若い」と思っていました。それは彼が祭司の家系の者であったからかもしれません。というのは、律法によれば、祭司の務めは 20 歳になってからと定められていたからです。ですから彼は、主の働きをするには自分の年齢ではまだ若すぎると思ったのではないかと考えられます。しかしエレミヤに対するご計画を実現するために、主は彼が胎内に形造られる前から彼を知り、生まれ出る前から彼を聖別し、彼を絶妙なタイミングで用いようと国々への預言者と定めておられたのです。したがって、エレミヤの召命の背景に、神の歴史支配におけるご自身の必然性があったことは明らかです。

●エレミヤの誕生した「アナトテ」という寒村、そして「エレミヤ」という名前、さらには祭司の家系のルーツ、ヨシヤ王の宗教改革運動といった視点から、エレミヤの召命の必然性を探ってみたいと思います。

●中東を取り巻く大国の勢力の均衡が崩れ始め、エジプトの勢力は衰微し、アッシリヤの支配からバビロンの支配へと変わって行こうとしていた時代です。そうした中でユダの歴代の王たちの心は揺れ、神である主に信頼するか、それとも偶像に信頼するか、その政策はまさに振り子を振るようでした。その振り幅は時代が進むにつれて大きくなっていきました。ユダの王たちの中で最善王と評価された王ヨシヤは 8 歳で王となり、ダビデの道に歩み、治世の第 8 年から自覚的に神を求め始めました。そして 12 年目にはユダとエルサレムにある偶像を徹底的に取り除きます。さらに治世 18 年目には主の宮を修理させます。そのとき大祭司であったヒルキヤが主の律法の書を発見したのです。その発見によって、ヨシヤ王の国家的宗教改革運動にさらなる拍車がかかったことは言うまでもありません。

●ところが預言者エレミヤは、そうした神のトラー回帰への流れとはかかわりなく、神のご計画を語りました。つまり、ユダの民が神の民となる真の改革は、政治的な運動によってではなく、神ご自身による「審判と回復」を通してなされることをエレミヤは語ったのです。つまり、エレミヤはヨシヤ王による改革とは異なる視点から神のご計画を語ったのです。それが当時のユダにどんな反応をもたらしたのかは火を見るよりも明らかです。つまり、エレミヤに託された主のメッセージはユダの取り組みとは異なるものであり、しかも、人々の拒絶を招くような内容だったのです。その意味では、エレミヤの生涯はメシア・イエシュアの型とも言えるのです。

### 1. 「アナトテ」に隠されている秘密

● 「アナトテ」 (עֲנַתוֹת)

アナトテはベニヤミン族の相続地からレビ人の町とされた48の町の一つで(ヨシヤ記 21:18)、エルサレムから北東4～5kmのところにある寒村です。そこは預言者エレミヤの出身地です。「アナトテ」という地名から見えて来るのは、その語源である「アーナー」(עֲנָה)の中に、「神は答えられるが、その働きには苦しみが伴う。しかしやがては必ず声をあげて主を賛美するようになる」という意味が隠されているということです。まさにそこはエレミヤのために備えられていた地であるかのようです。



●エレミヤは祭司の家系です。ここで祭司アロンの家系について確認しておきましょう。アロンには4人の息子がいましたが、上の二人(ナダブとアピフ)は異火をささげたことでさばかれ、死にました。第三番目の子は「**エルアザル**」、第四番目は「**イタマル**」です。

●旧約聖書に登場するアヒメレクはエブヤタルの父で、ノブの祭司だった人物です。サウル王のもとから逃げたダビデがノブの祭司アヒメレクの所に立ち寄りしました。彼はダビデとその従者たちに、聖所で祭司だけが食べることのできるパンとペリシテ人ゴリアテの剣を与えました。この一件がサウルに伝えられ、彼はダビデの反乱に協力した者として、仲間の祭司と共に殺されました。しかしその中の一人がその惨禍から免れて、ダビデのもとにやって来たのがエブヤタルです。彼はエポデを携えていたとあります(1サムエル 23:6)。この祭司「**エブヤタル**」こそ、アロンの子「**エルアザル**」の流れです。

●ところが、預言者となるサムエルを育てた大祭司エリがいます。彼はアロンのもう一人の子「**イタマル**」の流れの者で、シロで初めて大祭司となった人物です。彼の不肖の息子であるホフニとピネハスは、ペリシテとの戦いにおいて契約の箱をシロから持ち出し、箱はペリシテ人に奪われてしまいました。彼らも戦いで死にます。そのことを知った父のエリは仰向けに倒れて、首の骨を折って死にました。そのころ、ピネハスの妻はこれらの知らせを聞いたとき陣痛が来て、男の子を産みます。彼女はその子を「イ・カボデ」(אִי־כַבֹּד)と名づけました(1サムエル 4:20)。その名の直訳は「栄光はどこに」ですが、意味としては「栄光はイスラエルを去った」です。しかしその名は誕生名で、成年後の名は「**エブヤタル**」(原文は「エヴヤタール」אֶבְיָתָר)で、「なお残っている新芽」という意味です。おそらく、この名前はイタマル系の汚名返上と再興の悲願を託した名前であったと考えられます。

●整理をすると、祭司の二つの系列(「**エルアザル系**」と「**イタマル系**」)の中に、「**エブヤタル**」という同じ名前を持つ祭司がいるということです。誤解しないように気をつける必要があります。

●ダビデの時代には「**エルアザル系**の祭司ツアドク」と「**イタマル系**の祭司エブヤタル」がおり、ダビデは後者の方を重用しました。ところが、ソロモンが王となった後で、ソロモンは王位継承問題でアムノン側についたエブヤタルを主の祭司の職から罷免し、アナトテに返しました(1列王記 2:27)。アドニヤが王位を奪おうとしたときツアドクがダビデに忠誠を示したことから、ソロモン王は「祭司ツアドクをエブヤ

タルの代わりとした」(同、2:35)のです。この経緯を以下のように記しています。

【新改訳改訂第3版】1列王記2章25～27節

- 25 こうして、ソロモン王は、エホヤダの子ベナヤを遣わしてアドニヤを打ち取らせたので、彼は死んだ。
- 26 それから、王は祭司エブヤタルに言った。「アナトテの自分の地所に帰りなさい。あなたは死に値する者であるが、きょうは、あなたを殺さない。あなたは私の父ダビデの前で神である主の箱をかつぎ、父といつも苦しみを共にしたからだ。」
- 27 こうして、ソロモンはエブヤタルを【主】の祭司の職から罷免した。シロでエリの家族について語られた【主】のことばはこうして成就した。

●このようにして、シロでエリの家族について語られた主のことばは成就したのです。祭司エリの末裔の祭司であったエブヤタルはアナトテの土地を所有していたので、ソロモンにより祭司を免職された後に、この町に住んだのです。祭司の家系であったエレミヤは、アナトテで生まれ、神のご計画の中における絶妙なタイミングで預言者として召されたのです。その歴史的背景は、主の以下のことばによって確認できます。

【新改訳改訂第3版】エレミヤ書1章1～5節

- 1 ベニヤミンの地アナトテにいた祭司のひとり、ヒルキヤの子エレミヤのことば。
- 2 アモンの子、ユダの王ヨシヤの時代、その治世の第十三年に、エレミヤに【主】のことばがあった。
- 3 それはさらに、ヨシヤの子、ユダの王エホヤキムの時代にもあり、ヨシヤの子、ユダの王ゼデキヤの第十一年の終わりまで、すなわち、その年の第五の月、エルサレムの民の捕囚の時までであった。
- 4 次のような【主】のことばが私にあった。
- 5 「わたしは、あなたを胎内に形造る前から、あなたを知り、あなたが腹から出る前から、あなたを聖別し、あなたを国々への預言者と定めていた。」

●ここに、エレミヤの召命の必然性を見ることができるのです。

## 2. エレミヤが語るべきメッセージ

●しかしエレミヤが語るべきメッセージは、ユダとエルサレムに住む者たちに対して、徹底的な主による矯正のプログラムという土台に基づくものでした。つまり、神の民に真の希望と将来を与えるものでした。しかしヨシヤ王がなした主の律法への回復ではとても間に合わず、彼の語るメッセージはバビロン捕囚という亡国の痛みを通して、七十年にもおよぶ世代を越えた取り組みによって、神の民を再び「建て、植えさせる」というものでした。当然、このメッセージは当時の人々には受け入れがたいものであったことは言うまでもありません。それゆえ、エレミヤが苦難を受けることとなりますが、エレミヤは主の不可抗力なことばによって立ち、預言者として務めを全うしたのです。

- この預言を語るエレミヤに対して、主は次のように語っています。

【新改訳改訂第3版】エレミヤ書 1章 17～19節

- 17 さあ、あなたは腰に帯を締め、立ち上がって、わたしがあなたに命じることをみな語れ。彼らの顔におびえるな。さもないと、わたしはあなたを彼らの面前で打ち砕く。
- 18 見よ。わたしはきょう、あなたを、全国に、ユダの王たち、首長たち、祭司たち、この国の人々に対して、城壁のある町、鉄の柱、青銅の城壁とした。
- 19 だから、彼らがあなたと戦っても、あなたには勝てない。わたしがあなたとともにいて、——【主】の御告げ——あなたを救い出すからだ。」

- ここには預言者としての務めの厳しさと、その務めに対する主の完全な守りの保障が約束されています。最後に、エレミヤはその時代において、当時の人々が見ていなかったものを見ていました。それは主がなそうとする事柄(ヴィジョン)です。つまり、主が見ておられるものと同じものを見ていたのです。そこが重要なところ。今日、キリスト教会にさまざまなムーブメントがやって来ては消えて行きます。そこには現状を打ち破りたいという人々の熱意が多分にあるからです。しかし、神の御子イエシュアと同様に、御父がなそうとすることにだけ心を集中する必要があります。そうすることで、さまざまなムーブメントに翻弄されずに、神のヴィジョンをヴィジョンとすることができ、今日的課題を引き受けることができるのではないかと信じます。